

朝もやのなか、朝焼けのなか、甲州街道を YAMAHA のドラッグスター(名古屋ナンバー)が駆け抜ける。

風の音がぶるぶると耳元でうなる。

k がかなり破天候な運転をするので、ふたりとも笑いがとまらない。

東に向かう、朝焼けのなかに猛スピードで突っ込む感じになる。

朝の冷たい空気を切り裂くようだ。

おれは後部座席でイメージライダーのジャック・ニコルソンみてえに不適なツラしてた。

明大前で大荷物を持った猫ひろしとすれちがう、

ネコひろしー！と叫ぶと

にゃー!

と答えてくれた、景色とともに物凄い勢いでぶっとんで消えた。

笹塚

代々木

渋谷

青山

六本木

銀座

思い出だらけの東京が真っ赤に染まってぶっとんでいく。

東京をおれたちが制圧したみたいな気分になる。

やたら C 調でふざけすぎた。げらげら笑ってたら道に迷った。豊洲付近でこんがらがる。

というかおれの持ってる地図は東京の地図である。

あたりまえだが千葉のことは一切のっとりやせん。

「ちょっと一旦止まろう」笑いながら言う。

「お前今までよく生きてこれたなあ」と k が笑う。

千葉の現場に K が電話を入れる。集合時間は 8 時、

でも今 8 時。

おれたちは下町でワケわからなく迷ってる。

電話を終えたK、今日の現場すげえやさしいおじちゃんだわ、とホッとしている。

尚更、急がないとな、と言いながら一服する。

佃とか月島とか

錦糸町とか亀戸とか

ぶっとばしていく。

国道14号に入る。

あとは一本道だ。

何本も河を越える。

見たことないぐらいさみしい場所を越えていく。

ようやく千葉県に入る。

高速道路に乗る。

鼻水がぶっとぶ。

笑いがとまらないほど速い。眼が充血を隠せない。

突然、

プスプスプスプスプスプスとバイクが言い出し、力が抜けてくみたいに速度が遅くなってく。

ガス欠!

k が叫ぶ

振り返ると、後ろからは何台もドでかいトラックが来ている。

え、?

おれら、死ぬの?

そう思ったらあんまりに滑稽で笑けてきた。

プスプスプスプスプ

異常に遅い速度で斜めにバイクは進み。

よれよれしながら路肩で止まる。

ひと呼吸おいて、

まだお互いふるえてる。

おれたちは顔見合わせて笑った。

腹かかえて笑った。

容赦ないスピードでたくさんの自動車が駆け抜ける高速道路で

おれたちは呼吸ができないほど爆笑した。

まだ朝の9時、

曇り空のした

おれたちはあんまりにも馬鹿馬鹿しくて、あんまりにも滑稽で、

酸素をたくさん吸い込んで笑った。

次の料金所まで

900mバイクを押した。

写真はそんなときのものだ。

適当にふざけながら二輪を転がして、料金所のオヤジのくすんだ黒眼に見守られながら高速を鈍速で降りて

出光でガソリン入れて

また走り出す。

腹がへったで、セブンで朝飯を買う

ケンちゃんがまた現場に電話する。

「途中までやさしかったのにガス欠って言った瞬間、態度が豹変してめちゃめちゃ冷たくなったわ」

と言う。

「嘘だと思われたかな、というか考えたら嘘以下だな、つーか俺らの現実、嘘以下だで!」

嘘以下!

おれはその言葉にハマりすぎて、食ってた赤いきつねをぶわっと吐き出した。

セブンの駐車場の灰色のコンクリートが濡れて黒く光った。

あいかわらず笑いがとまらないんだ。

賢ちゃんも赤いきつねを食った。

これ、でらうまいのう、

でえぶうまいわ、

グッドチョイスじゃ!

good choice だけど

bad road じゃ!

現場は千葉駅のヨドバシカメラの地下4階だった。

ついたのはもう10時半だった。

初老のやさしい職人だったのでおれたちの申し訳なさは倍増した。

私語ひとつ無く、まゆひとつ動かさず。

鉄筋を運び続けた。

トランス状態になるまで鉄筋を運び続けた。



5時に終わった。

明るいうちに千葉を出た。

14号を疾走。

涙も鼻水も迷いも何もかも凡庸な景色と一緒にぶっとんだ。

例の高速道路に乗った。

浮かれて叫んだりして、手放したら何度も落ちそうになって震えた。

行きにエンストした場所を通過した。

賢ちゃんがアホみたいにスピードを出して何台も車を抜いた。

体験したことのない速度だった。体が魂だけになるような気がした。

そこには純化された生身のおれがいた。

とにかくぎりぎりだった。
メーターは120キロを超えていた。

大きな橋を渡ると、夕暮れに東京の巨大なビルたちが輝きまくっていた。

泣けるほどすてきだった。

東京が輝いていた。

それはロスト・イン・トランスレーションやキル・ビルの異郷化された TOKYO だった。

神谷町をまわって東京タワーを見た。

ヤツはやっぱり輝いてた。

期待を裏切らないヤツだ。



東京がすきだ。

空虚を埋めようとするように散りばめられた輝きが、せつなくて美しいんだ。

おれは東京がすきだ。

叫び声も笑い声もぜんぶ、風にかき消されてもまだおれたちは笑っていた。